

令和 4 年度 学校評価シート

学校名：県立みくまの支援学校

校長名：松下 幸嗣

目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

- ・自立と社会参加を目指して、たくましく生きぬく、心豊かな児童生徒
- ・保護者や地域との連携を深め、共に学び、高め合う相互往還な関係を構築する学校
- ・専門性と根拠に裏付けられた確かな教育実践に取り組む学校

学校評価の公表方法

- ・学校関係者評価を含め、保護者あて文書にて配布するとともに、本校ウェブページで公表する。

現状・進捗度

A	十分に達成している。	(80%以上)
B	概ね達成している。	(60%以上)
C	あまり十分でない。	(40%以上)
D	不十分である。	(40%未満)

自己評価（分析、計画、取組、評価）

号	計画・取組				評価（2月10日現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	学部間の連携と系統性を重視した教育課程づくりと実践的授業力の向上を図る	C	教育課程検討委員会を軸に、PDCA サイクルに基づく全校的な全校研修を年間8回、企画・運営する。	全校研修に対して、70%以上の教職員が、肯定的な意見を有する。	B	学部単位での研修が主だったが、全体で確認が必要なことは Zoom を活用。職員の研修についての意見は概ね肯定的であった。	研修については教科を絞り、実際に授業に活かせる校内研修の実施を各学部で行っていく。 情報・外国語の指導については今年度と同様に取り組みつつ、R6年度からの教育課程への位置づけについて次年度に決定する。 学部間の連携については引継のための会議の設定や資料作成を継続し、各学部の研修内容の交流を行う。
			情報・外国語（英語）について教育課程上の位置づけと指導内容を検討する。	各学部で「情報」「外国語（英語）」のねらいと学習内容を検討し、今後の教育課程への位置づけを明確にする。	B	外国語に関しては他校の情報収集と各学部の英語科担当でグループを設置。情報・外国語とも今後の方向性について検討中である。	
			教科指導における各学部の課題を明確にし、定期的に検討の場を設定し授業改善・授業力向上に取り組む。	学部間連携会議を年間2回以上設定し有効活用しスムーズな引継ぎを行い学びの連続性を生み出す。	B	学部間連携会議により卒業・入学した生徒の情報交換を、また個別の指導計画は次年度の計画に現担任が実態を記入する等の方法で引継を行っている。	
2	学校運営協議会を核として、保護者や地域との連携を深める	B	マンスリータイムズ等で広報活動を行う。また、行事やトピックス等、地方新聞に積極的に広報活動を実施。	地域閲覧板や、ホームページ等で毎月広報する。コロナ禍であるが地方紙に20回以上、広報を実施	C	マンスリータイムズについては、毎月ホームページに掲載することができた。地方紙への広報活動は7回実施したが目標の20回以上は達成できなかった。	新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、学校行事に制限をかけたため地域や保護者との連携は難しかったが、学校運営協議会で話し合った「農福連携」について今年度は一歩踏み出すことができたので、更に活動を広げていく。また、地域の方々に本校を知ってもらうためにホームページの充実、地方紙等への積極的な広報活動を実施する。
			本校の施設等活用し、地域住民等の支援学校への来校頻度を高める。学校周辺地域を教材とした教育活動を展開する。	学校開放月間に来校者250人以上。学校周辺地域での教育活動を各学部で年間3回以上実施できたか。	B	学校開放期間は設けたが250人以上の来校者は達成できなかった。学部ごとの教育活動は3回以上実施することができた。	
			本校の教育方針や取組を育友会活動や学校行事等を通じ、保護者と協働し広報できる機会を設定する。	保護者の6割以上が、学校行事等の取組に参画する。	C	保護者全体での学校行事等の取組はできなかったが、学部ごと等の小集団での取組は実施することができた。	
3	相互往還の仕組みを重視したセンター的機能の推進・充実を図る	B	センター的機能の中心である教育相談活動等に若手教員を起用し、人材の育成を図る。また、定期的な研修会を開催し、教員の資質向上を図る。	若手教員とともに年間来校相談を10回以上、巡回相談を2回以上実施する。コーディネーター研修会を年間8回開催する。	B	現在、教育相談11回、巡回相談8回それぞれ実施することができた。コーディネーター研修はこれまでに7回開催できている。	相談業務に若手教員を積極的に起用し、人材育成の取り組みを継続する。 施設改修で業務の縮小が予想されるが、そのことをチャンスと捉え、運営計画や業務内容の見直し、高等学校との連携をはじめとした当地域の特別支援教育のさらなる充実を目指す今後の取り組みについて協議する。
			特別支援教育コーディネーター等連絡協議会を開催し、新宮・東牟婁地域の特別支援教育の理解深化に努める。	インターネットを使って講演動画を配信し、90回以上の動画再生回数を得る。	B	80名の参加申し込みがあり、131回の再生回数があった。	
			地域の関係機関が主催の会議や研修会等に積極的に参加するとともに校内にも参加を促し連携を深める。	和歌山オージオロジーや和歌山大学COフォーラムの広報活動を実施する。学校関係者だけではなく福祉関係主催の会議等にも参加する。	B	昨年度までの連携機関との取り組みに加え、新たな福祉分野の研修にも参加した。	
4	キャリア教育の視点、小学部から高等部卒業までの系統性を重視した進路指導の充実を図る	C	小・中・高の系統性のあるキャリア教育に取り組むための指導計画を作成し進路学習の充実を図る。	キャリア支援・指導計画を作成する。事業所や施設の見学及び現場実習の充実を図る	B	高等部・中学生徒の事業所及び施設見学の実施。また、地域の企業の協力の下、一般事業所や福祉事業所での現場実習の実施などに取り組んだ。農福連携を進めるために、JAとの連携を深めることができた。	キャリア支援・指導計画については、小・中・高での連携をさらに深めていきたい。これまで訪問したことのない企業にも協力してもらい、見学等を行いたい。 また、今年度実施した、福祉事業所ガイダンスは、来年度は実施せずに、進路に関する取り組み等の説明を全保護者対象に行う予定。 事業所ガイダンスは、施設側の負担も考慮して、2年に一回の割合で実施できればと考える。
			進路指導に対して、保護者・担任・進路指導部が連携し共通理解を図る。	福祉事業所ガイダンス、進路個別面談・進路懇談を実施する。年間3回以上の進路だよりを発行する	A	福祉事業所ガイダンスを実施し、中学生部高等部保護者に進路に関する情報提供をすることができた。	
			福祉施設・関係福祉機関と連携を図りネットワークの樹立に努める。	定期的な進路先の訪問、進路協議会の開催職業安定所等と連携した移行支援を実施する。	B	進路担当者が一人であるため、十分かアフターフォローができていないが、事業所から何か連絡があったときは、できる限り迅速に対応するように留意している。	

学校関係者評価（2月14日実施）

- 【保護者】（学校評価アンケートより）
- ・子供たちは生き生きと楽しそうに授業や学校生活に取り組んでいる。
 - ・先生方が学校生活の中でいつも子どもたちに寄り添った教育を行っており感謝している。
 - ・防災については意欲的に取り組んでいたが、授業や特別活動の中で例えば災害トイレの練習や防災ベットの体験等、更に力を入れてほしい。
 - ・コロナ禍ということで難しいが地域とのつながりを深くしてほしい。
- 【学校運営協議会委員】
- ・コロナ禍のため学校開放週間等がなく学校の様子があまり見れていない。リモート会議（オンライン）を活用して報告していただければありがたい。
 - ・進路指導については、本年度もまだコロナ禍であり農福連携とまでは至らなかったが、JAみさきさんの提案で第一段階としての農業体験を実施することができ良かった。今後更に実施方法等を含めて連携を図っていく必要がある。
 - ・昨年、雇用させて頂いた卒業生はきちんとできているが、1年間の様子を見てみると、周りの従業員との関係作りが大切であり、学校と就労先等との勉強会が必要である。
 - ・学校を理解して頂くためには、行事や防災活動等の取組を地域への発信が大事である。外部への発信が少し少ないと感じる。情報発信があれば、地域としてはいつでも協力できる。
 - ・福祉として密接な関係があり、学校と協力体制を強くもってもらっているので凄く評価が高い。地域で子どもを支えていく中で地域の関係者と連携するという点では生活支援が大切になるのでそういったところを高めていってほしい。